



家族の絆が 牡蠣を育てる。

寒さが厳しくなる冬は、牡蠣がますます美味しくなる季節だ。
今回ご紹介するのは、宮城県南三陸町で牡蠣養殖を営む阿部さん一家の「戸倉」さま。
4世代7人家族の阿部さんたちが育む物語をお届けしよう。





今でも毎日6時間以上の牡蠣剥き作業が必要だ。



阿部民子さん

沖合では黒潮と親潮がぶつかり、山からは豊富な栄養が注ぎ込む、牡蠣やワカメの理想的な養殖環境である。

この志津川湾の南岸、戸倉地区で阿部さん一家は代々漁業を営んできたが、震災前は収入の減少が続き、漁業に先はないと考えていたという。もと

もと銀鮭の養殖を手がけていた徳治さんだが、餌の高騰と価格の大暴落によって大きな負債を抱え、1996年に銀鮭の養殖を撤退。安定収入を求め牡蠣養殖に転換した。後発の参入ではあったが牡蠣の生育環境を重視して思い切った資材投資を行い、地域で一

番の水揚げ量を誇るまでになった。しかし、バブル景気が崩壊した頃から環境が悪化。牡蠣の卸価格が一気に低下したのに加え、志津川湾の過密養殖が進行し、牡蠣の品質悪化を招いたのだ。昔は1年で出荷できていたものが2年、3年と延び、労働時間も長く

震災、そして漁場改革

そんな時期に訪れた、東日本大震災。津波は大き過ぎる傷跡を残したが、実は海に恩恵をもたらしたという。

バブル期の頃から、牡蠣やホタテ、銀鮭などの養殖によって濁っていた志津川湾は、さらに筏の数を増やしたことで筏から落ちる堆積物が海底に蓄積。これが海の栄養循環を滞らせ、海中の酸素を奪っていた。さらに餌となる植物性プランクトンが牡蠣に十分行き渡らず、成長鈍化と品質低下の悪循環に苛まれていたのである。震災が発生したのはそんな矢先であったが、津波が海底の堆積物をきれいに流し去ってくれたことで、皮肉にもかつての海の状態に戻ったのだ。

これを見た戸倉の漁師たちは、牡蠣部会長のリーダーシップのもと、筏の数を3分の1に減らす漁場改革を始



操船する阿部徳治さん。震災時は一人船を沖に出し、船を津波から守った。



震災前は6軒の漁家があった浜に、今は徳治さんの船だけが浮かぶ。



加工場や養殖施設など、船以外の全てが津波で流された。

2011年3月11日、阿部徳治さん(61)は船で沖に出ていた。妻の民子さん(59)は次男の後さん(34)と一緒にワカメの芯抜き作業に動しんでいた。大きな揺れにすぐさま避難したが、津波の脅威は想像以上。家も養殖棚も、全て流され、徳治さんの父親、徳太郎さん(当時85)は行方不明になってしまった。

「目の前で近所の人が流されるのを見て、頭が真っ白になったんです。後の記憶はないのに、その瞬間だけは鮮明に覚えているの」と、民子さんは当時を振り返る。「海が怖くて仕方がない。嫌だ嫌だ、海から離れたい」。一時は離婚すら考えたほど海に対する恐怖を覚え、仮設住宅に移しても気が休まることはない。津波のフラッシュバックに悩まされ、生活への不安に眠れぬ日々。やがて避難所を回る生活支援相談員の仕事に就き、海を離れた。

私たちの代で漁業は終わり

宮城県南三陸町は、志津川湾を抱き込むように三方を山に囲まれている。

なり、品質も良くならない。「毎日15時間くらい働いても収入が減る。私たちが漁業は終わりだね」と夫婦で話していたのと民子さん。